

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

AA 研共共課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究—トランスナショナルなネットワークと現地の応答」

2020 年度第 1 回研究会（通算第 1 回目）

日時：2020 年 7 月 19 日（日）14:00–17:30

場所：ZOOM 会合

概要：2020 年 7 月 15 日（土）に第一回の研究会を実施した。代表の富沢寿勇静岡県立大学教授と副代表である AA 研の床呂所員による趣旨説明に続いて、下記のように AA 研の床呂所員による報告と参加者全員による質疑応答を実施した。報告の概要はそれぞれ下記の通りである。

報告タイトル：ウンマとバンサの狭間で—フィリピンの「モロ」社会におけるイスラームとアイデンティティ

報告者：床呂郁哉（AA 研）

要旨：東南アジアのイスラームやムスリム社会の中でも最周辺部（？）に位置するが故に、相対的に知られることが少ないフィリピンのムスリム（通称「モロ」Moro）社会を対象に、その分離主義運動・紛争（ミンダナオ紛争）の文脈におけるイスラームとアイデンティティの問題を検討した。

報告者は、まずフィリピンのモロ（ムスリム）社会の概要に関してその地理的分布や人口などの基礎情報から紹介した。また本報告で扱う「モロ民族」(Bangsa Moro) はフィリピンのムスリムへの総称であり、もともとスペイン人が北アフリカのムスリムに対して使用していた他称であること、実際には複数の言語・民族集団（小文字の／複数の bangsa）を含むことも確認した。

次に 1970 年代以降のいわゆるミンダナオ紛争に関して、その概要と背景の総括を行った。まず、この紛争の背景としては、多数派キリスト教徒によるミンダナオ入植とムスリムの土地の収奪と土地争いの頻発（1960 年代末）を指摘することができる。いわばムスリムの強いられた脱領土化が紛争の大きな背景にあると言える。また紛争の経過としては、キリスト教徒移民とムスリムの土地争いやキリスト教徒自警団・治安部隊によるムスリム虐殺事件

などが引き金となった点を指摘した。

同紛争の大まかな経過としては、まず MNLF（モロ民族解放戦線）が分離独立求めて 70 年代前半から武装蜂起し、紆余曲折を経て 1996 年に和平合意に至った。しかしその後も、AA 研共同研究課題 報告要旨 1000 字から最大 2000 字以内程 MNLF から 80 年代に分派した MILF（モロ・イスラーム解放戦線）と国軍の戦闘が継続した。しかし 2000 年代中盤以降にはマレーシアや日本など関係各国の働きかけを媒介とする和平プロセスも段階的に進展を見せ、最終的には 2019 年のバンサモロ自治法案への住民投票を経て、MILF はフィリピン南部での自治区（BARMM）設置を核とする自治政府への参加に合意するに至った。報告者は以前から MILF 関係者らへのインタビューを含む調査を実施してきた。その過程で見えてきたのは、同組織の幹部を含む関係者らが、一方でマレーシアやリビアとの関係ははじめトランスナショナルなウンマ（ムスリムの共同体）とのネットワークに依拠した活動を展開しつつも、他方で闘争の理由として土地問題の強調、すなわち「不当に奪われたバンサモロの先祖伝来の土地」の回復などを強調する傾向にあるという点である。言い換えれば「ウンマ」を基軸とするトランスナショナルなイスラームやムスリム共同体への連帯という方向性と同時に、他方ではバンサ・モロ（Bangsa Moro）をキーワードとするエスノナショナリズム的言説も特徴的であるという点であった。

イスラームのジハード論の文脈においては、概して、これまでのモロ（フィリピンのムスリム）の主流派の武装組織であるモロ民族解放戦線（MNLF）やモロ・イスラーム解放戦線（MILF）が、どちらかと言えば「異教徒によって不当に奪われた先祖伝来の土地の回復・防衛」を主眼に置き、これは思想的にはいわゆる古典的な防衛ジハード論の文脈で位置づけることが可能である点を報告者は指摘した。

これに対して、2017 年 5 月にミンダナオ島のマラウイ市の占拠事件とその後の国軍との激しい衝突を惹起した、いわゆるマウテ集団（MG）とアブサヤフ集団（ASG）の思想や主張、政治的イデオロギーは、MNLF や MILF など従来のモロ分離主義運動の組織とは異質である可能性に言及した。

具体的には、ASG や MG らは、2015 年前後から中東のテロ組織 IS との影響や繋がりを強調する傾向を示しており、そこでの闘争のアジェンダは、必ずしも上記の古典的な防衛ジハード論の文脈だけでは把握できず、むしろカリフ制の樹立であるとか、手段としてのタクフィールを含む、いわゆる革命ジハード論に強く影響を受けている可能性を論じ、モロ社会におけるジハード思想の変容の可能性を指摘した。ただし、現地の「モロ」住民らへのヒアリング結果からは、上記の MG や ASG の思想や行動は、一般のムスリムの多数派の支持や共感を集めていないという事実にも留意が必要である。

本報告の時点（2020 年 7 月）では、MILF が自治政府に参加したことに伴い、MILF とフィリピン政府の間での武力衝突は過去の話となり、今後は自治の深化、マラウイはじめ紛争地の復興プロセスと和平合意に基づく MILF の武装解除などが更に進展することが期待されている。

しかしながら懸念材料もないわけではない。先述の ASG をはじめとして、少数の先鋭化した武装勢力は現在もスールー諸島などを中心にテロ活動などを止めようとしていない。

ミンダナオ島のマギンダナオ州周辺でも、MILF から分派した BIFF（バンサモロ・イスラーム自由戦士）と国軍の戦闘は継続しており、2020 年 3 月前後だけで 7 回の衝突を数えるに至っている。

更には、そうした国家対非国家アクターの垂直的紛争の他に、「リド」と総称されるムスリム同士の報復闘争や、いわゆる海賊などの非国家アクター同士の水平的紛争のリスクも消滅していない。このように「モロ」集団内部での言わばマイクロな分極化や遠心分離的なベクトルの存在を指摘することもできる。これは現地における「バンサ」概念の多義性とも無関係ではないことを、報告者は現地の文脈に即して指摘することで報告を終えた。

以上の報告に対して参加者からは、「ルマッド」（ミンダナオの非ムスリムの先住民）の位置づけや「モロ」との関係、また中東など域外との比較などを含めた質問やコメントが寄せられた。このうち「ルマッド」と「モロ」の間では歴史的にも、植民地時代以前からの共存と葛藤の複雑な愛憎関係が存在し、その背景が現在にも影を落としているという回答があった。中東との比較に関しては、フィリピン南部における MG や ASG などの主張がどれだけ従来のジハード論と異質であるのか否かに関しては更なる検討が必要であるとのコメントも出た。また南アジアにおける「バンサ」概念との異同に関しても参加者から指摘があり、「バンサ」概念がサンスクリットなど南アジア由来であったとしても、南アジアの文脈とはやや異なるニュアンスでモロ社会において受容されている点なども確認された。

（以上終わり。）